「小児期からの健康増進対策に関する研究」の総括

福渡　靖

要約：平成６年度の分担研究のリサーチクエスチョンは、①既存のフィールドスタディを分析し、肥満、高脂血症、高血圧、高コレステロール血症のトラッキングを証明できないか、②幼児期、学童期の効果的な食生活、運動の指導は何か、③食生活、生活習慣の地域差を評価できるか、の３点である。

本年度は、コーホート調査を継続して実施した。同時にコーホートを本格的に開始した平成４年度調査におけるアンケート調査から、生活習慣、食生活について児童生徒の地域別観察を行った。

リサーチクエスチョン①については、森、伊谷、武藤、山内、有阪、岡田、竹内がトラッキング現象を認める報告を行っている。

②については、コーホート調査の直接の対象は幼児、学童であるが、介入（指導）の対象は必ずしも幼児、学童とは限らなくて、幼児期には保護者（主に母親）を主対象とし、学童期には低学年では保護者を、高学年では学童本人と保護者を半々に主対象とすると仮定し、これを実証しようとした。神谷は、学童、家族を対象としてカラースライドなどを用いて働きかけた。森尾は、県保健所職員、町村職員、小・中学校養護教諭および栄養士が情報交換をする場としての「学校・地域保健の情報交換会」を設立して各種のパンフレットを作成し、介入に用いることにした。西田は、幼児の保護者に対して歯科保健に関するアンケートを行い、その集計結果をまとめた小冊子や、虫歯予防に関するパンフレットを介入に用いることにした。いずれの場合も本年度に結果の評価を行うことはできず、来年度以降継続する事とした。

③については、簑輪が学童について観察し、児童生徒の食生活習慣や家庭環境について、居住地域との関連性を明らかにし、食生活習慣について因子分析を行った。結果としては、食生活には地域差が認められ、因子分析の結果も地区別に違いが認められた。

今後の研究方針としては、コーホート調査の継続実施、食生活・生活習慣の年齢別、地域別の解析を引き続き実施、食生活・運動についての介入方法の検討と評価の実施、肥満等のトラッキング現象の評価を行うこととしている。

見出し語：コーホート調査、トラッキング、生活習慣、食生活、介入、肥満

順天堂大学医学部公衆衛生学教室

(Department of Public Health, Juntendo University School of Medicine)

1．コーホート調査の継続実施

平成4年度までに設定した7656名の集団を対象として、そのうち3858名の追跡調査を行った。追跡の方法としては、生活習慣、食生活に関するアンケート調査、血液検査、保健行動に関するアンケート調査等、介入との関連もあり、地域による差があった。追跡方法別に見ると、身体計測等の身体検査を行ったものが1627名、アンケートによるもの2775名、その他の健康教育、住民基本台帳による調査等によるものが1083名であった。竹内らは小学校5年生1137名に健康診断、血液検査と生活習慣および自覚症状に関するアンケート調査を行い、血清脂質を中心に検討し、血清総コレステロール高値の者は、有意に身長が低く、HDLコレステロールが高く、運動、朝食の欠食、食べる早さと血清脂質値に関係が認められる結果が得られた。神谷らは、小学校1年生（現在3年生）の児童とその家族を対象に検診結果を報告し、同時に半数の対象にはカラースライド（高コレステロールに関するもの）を用いた健康教育を、残りにはパンフレット（肥満に関するもの）を用いた健康教育を行った。その結果の評価については本年度結論を得るには至らなかった。岡田らは、小学校1年31名、4年生61名、中学1年生110名を対象として、身体計測、血圧測定、血液検査とアンケート調査を行った。その結果、肥満度、最大血圧、総コレステロール、中性脂肪等でトラッキング現象がみられた。北田らは、中学1年生73名を対象に、身体計測、血液検査およびアンケート調査を実施し、肥満度、血清脂質および血圧などのトラッキング現象が認められたが、これは一定の介入下でも見られたものである。介入については、小学生児童とその保護者に行ったが、健康的な生活習慣の確立には食生活等の改善と運動奨励の重要性を示す結果を得た。森尾らは、小学3年（当初の1年）215名に対して身体検査、血液検査およびアンケート調査を行い、この3年の間に軽度肥満者（肥満度20％以上）の割合の増加と肥満者に早食いの傾向が認められた。同時に、介入の方法について検討し、県保健所職員、町村職員、小・中学校養護教諭および栄養士が情報交換をする場として「学校・地域保健の情報交換会」を設立し、「朝食は一日の元気のもと」「妊婦さんの食生活、お母さんの栄養が赤ちゃんの心と身体を育てます」「幼児の食生活、朝ごはんちゃんと食べさせていますか」「中学・高校生諸君へ、今の自分、好きですか。心と身体の栄養足りていますか。」の4冊のパンフレットを作成し、小中学校に配布したが、使用方法は検討中である。住友は平成4年度に3歳児を対象としたコーホートを設置したが、その対象者474名について、住民基本台帳から

平成７年１月１日現在の住所を確認して、転出入の状況について集計し、19.2%がすでに市外に転出していることを明らかにした。西田らは、平成５年に、初回調査の集計結果を対象者に返却する際、住所の確認と併せて、幼児の保護者に対して歯科保健に関する質問紙調査を行った。平成６年度はその集計結果をとりまとめ、今後その集計結果をもとに小冊子を作成し、虫歯予防に関するパンフレットと併せて、介入に用いることにした。また、今後の介入の実施について、市福祉部など関係機関と打合せを行った。

２．トラッキング現象の観察

コーホート調査とは別に、森らは、Shimane Heart Study を用いて開発したTracking Indexの検討を血圧について行い、Tracking現象を認めたが、６～９歳と比較して、９～12歳の Tracking Indexが低値を示し、12～15歳のTracking Indexが高値を示すことを明らかにした。伊谷は小・中学校児童生徒について４年以上９年以下の継続観察を行い、体格の比較を血清脂質検査を加味して考察をした結果、小中学生時代の体格は、成人の体格と関連する可能性を明らかにした。

３．食生活、生活習慣の地域差の評価

簑輪らは、コーホート調査実施６地域（千葉県芝山町、大阪府ＰＬ学園、大阪府森河内小、三重県河芸町、静岡県磐田市、島根県隠岐郡）の児童生徒2970名のうち、食品摂取頻度調査が実施されなかった磐田市を除き、10歳以下の1403名について、食生活習慣、家庭環境と居住地域との関連性を明らかにするとともに、食生活習慣について、因子分析により共通する因子を分析した。男子では大阪府ＰＬ学園で摂取頻度が多いのは、インスタント麺類、夜食、肉類、少ないのは間食であり、大阪府森河内小で摂取頻度の多いのは、間食、パン、三重県河芸町で摂取頻度が多いのは間食、千葉県芝山町で摂取頻度が多いのは夜食、野菜であり、少ないのはパン、島根県隠岐郡で摂取頻度が多いのは夜食、少ないのは野菜、肉類、麺類であった。女子では、大阪府森河内小で摂取頻度が多いのはパン、島根県隠岐郡で摂取頻度が多いのは夜食、肉類、麺類、揚げ物、野菜、少ないのは外食、千葉県芝山町で摂取頻度が少ないのは肉類、麺類、揚げ物であった。この結果、地域ごとの食品摂取状況が明らかになってきた。食生活習慣にも地域性があることが考えられ、今回の結果は都市農村という単純な地域的違いだけでなく、より多様な食生活習慣の違いが生じてきているためであることを裏付けたものとして意義があった。

検索用テキスト　OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約:平成 6 年度の分担研究のリサーチクェスチョンは、①既存のフィールドスタディを分析し、肥満、高脂血症、高血圧、高コレステロール血症のトラッキングを証明できないか、②幼児期、学童期の効果的な食生活、運動の指導は何か、③食生活、生活習慣の地域差を評価できるか、の 3 点である。
本年度は、コーホート調査を継続して実施した。同時にコーホートを本格的に開始した平成 4 年度調査におけるアンケート調査から、生活習慣、食生活について児童生徒の地域別観察を行った。
リサーチクエスチョン①については、森、伊谷、武藤、山内、有阪、岡田、竹内がトラッキング現象を認める報告を行っている。
②については、コーホート調査の直接の対象は幼児、学童であるが、介入(指導)の対象は必ずしも幼児、学童とは限らなくて、幼児期には保護者(主に母親)を主対象とし、学童期には低学年では保護者を、高学年では学童本人と保護者を半々に主対象とすると仮定し、これを実証しようとした。神谷は、学童、家族を対象としてカラースライドなどを用いて働きかけた。森尾は、県保健所職員、町村職員、小・中学校養護教諭および栄養士が情報交換をする場としての「学校・地域保健の情報交換会」を設立して各種のパンフレットを作成し、介入に用いることにした。西田は、幼児の保護者に対して歯科保健に関するアンケートを行い、その集計結果をまとめた小冊子や、虫歯予防に関するパンフレットを介入に用いることにした。いずれの場合も本年度に結果の評価を行うことはできず、来年度以降継続する事とした。
③については、簑輪が学童について観察し、児童生徒の食生活習慣や家庭環境について、居住地域との関連性を明らかにし、食生活習慣について因子分析を行った。結果としては、食生活には地域差が認められ、因子分析の結果も地区別に違いが認められた。
今後の研究方針としては、コーホート調査の継続実施、食生活・生活習慣の年齢別、地域別の解析を引き続き実施、食生活・運動についての介入方法の検討と評価の実施、肥満等のトラッキング現象の評価を行うこととしている。